

## 1 工程@1円～知的障害者の労働現場

### 40： 障害者福祉は何を失ったのか？

千葉 晃央

#### フェリーという密室

前回、京都のオーバーツーリズムの中で、営まれる知的障害者の労働現場について書いた。新型コロナウイルス性肺炎が流行り、京都の景色が劇的に変わる前夜だった。

学生時代、当時の豪華客船ふじ丸に乗って「ABCカルチャーシップ 少年少女の船」のリーダーとして一週間かけてグアムサイパンに行った。小学生のグループ担当で、子どもたちと一緒に寝起きした。その時、欠かせなかったのが消臭スプレー。とにかく臭いがこもる。子どもたちでも、足やら何やらで船室がにおう。窓が開く部屋は一部で他は密室。空調があっても、あくまで人工的なもので、威力は知れている。客船乗客の転落、行方不明の数が結構多いというデータも見た。窓が開かないのも納得。このふじ丸は阪神淡路大震災、東日本大震災でも現地に寄港し、避難所機能を提供した。現在は現役を引退し、中国に船があるそうだ。今回のダイヤモンドプリンセス号の件。客船の逆機能をみているのが歯がゆかった。

京都から外国人の姿が消え、キャリーケースを転がす風景を見る機会が減った。お

かげで交通機関がスムーズに利用できるようになった。その一方で観光にシフトしていた地域経済は大打撃。そしてクルマ産業だけでなく、メイド・イン・チャイナのものが止まりつつある。知的障害者の現場では下請け作業として取り組んでいるものに、当然中国製のものがあり、供給のストップが見えてきた。今後の工賃（知的障害者の方が持ち帰る給料）の落ち込みは現実のものになるだろう。

#### 報告をためらうような制度の欠陥

インフルエンザでも、障害者事業所で一定数以上の発症があると行政に届ける義務を課されている。先日の大阪の病院からの内部告発的話題があったように、疑わしい人も含めて報告するとその病院は閉鎖になり、経済的打撃をうけ、病院経営を圧迫する。そのため、報告しないという判断が生まれる。現在の病院にまつわる制度の負の側面が露呈した。つまり、結果として報告しない。当然これでは正確な事態がわからない。感染経路の把握は無理になる。

同じような仕組みになっているのは障害者の現場でも同じである。利用者一人が施



設を利用して、はじめて国から福祉施設は  
お金がもらえる。以前のような月単位で在  
籍者が幾人だから、これだけで運営しな  
さいとお金がつくという仕組みではない。つ  
まり、いくら昼食や仕事を準備していても、  
欠席になれば、その労力は一切カウントさ  
れない。そこで経費はなかったかのような  
扱いである。この仕組みの弊害は、このよ  
うな病気の蔓延のときにもよくない動きを  
誘発する。先の病院の例と同様、病気の蔓  
延を報告すると事業所閉鎖に追い込まれる  
ので、報告しないという選択がちらつくの  
である。実際そんな声が聞こえてくる。こ  
れは制度の問題であり、福祉機能という公  
が持つべき余裕の部分がやせ細っている結  
果である。社会や国民がどこに、どれだけ  
のお金を使うかについての判断の結果であ  
る。それが目の当たりになっているので

ある。

### 医療、福祉、環境産業にもマスクがない

障害者が働くリサイクルにまつわる現場  
からは、マスクの不足が課題となっている。  
衛生面からマスクは欠かすことができない。  
医療、福祉の現場の次ぐらいに必要な現場  
といえるのではないか。リサイクルの現場  
では粉塵がつきものである。環境行政にか  
かわった職員がその後何十年か後に肺気腫  
になる例は裁判になるぐらい問題になって  
いる。震災後の被災地支援でもアスベスト  
の飛散と、作業者のマスクの使用による健  
康被害対策は課題になってきた。障害者が  
働く現場は現在、こうした危機にも直面し  
つつある。



学校休校の要請に始まり、いよいよデイサービスの利用中止の報道があった。これでは利用実績がなくなると事業者が破産に向かう可能性すらある。

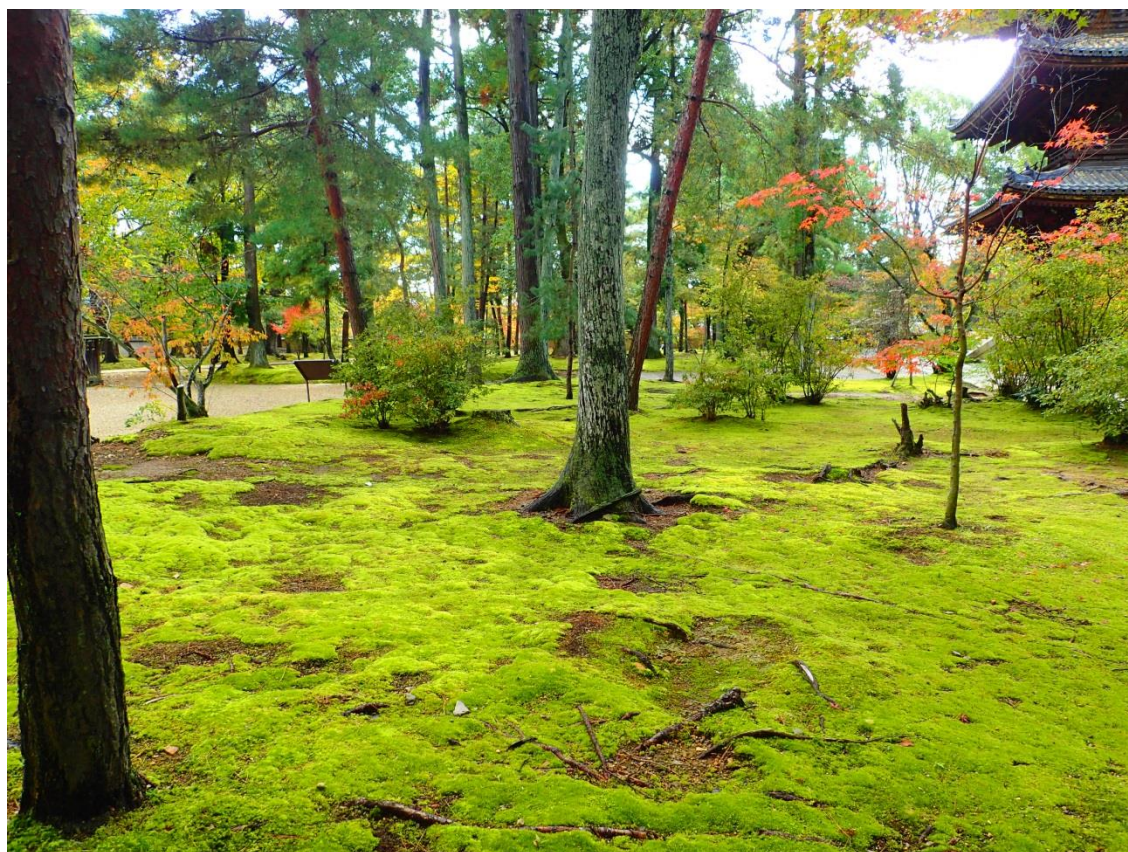
### 福祉業界の危機

知的障害者の現場では、利用者がとても不安を感じている。感じていても、うまく伝えられないことも多いのがこの領域である。でもテレビをみても、街をみても、いつもと違うのはわかる。そんな中で、「マスクをして欲しい」、「手洗いをして欲しい」、「うがいをして欲しい」と求められる行動が増えている。論理的に納得してするならば、まだよい。しかし、この領域ではそううまくいかないこともある。イライラして

しまう、声が出てしまうなど、そういったかたちで不安を表現されていることもよく見かけるのが現在である。今回のような未知の事態。世の中全体が知らないが故の不安を抱えている。利用者の方々にとっての不安は、その何倍にも上ることもあるだろう。

肺炎のことがなくても、この年度末は福祉の収縮を感じざるを得ない状況があった。現場からは「福祉崩壊」という声が先日は聴こえてきた。スタッフがいないのである。必要なはずの事業では運営ができない制度の仕組みになっているのである。

いよいよ、この局面をどう打開するかが問われる。何かを捨てて、より大きなことを得る。これが求められている。まずは捨てられるかである。ここがポイントになるだろう。手にたくさんものを持っていれ



ば、それ以上は持てないし、なおさら今以上の大きなものは持てない。一旦手を離すことができるかである。

そんなところまで来たのが現在の知的障害者の労働現場のように思う。1996年～2020年まで24年間、その現場にいた。これからは、少し距離を置くことになりそうである。この連載も、ここで一旦区切る。また書くこともあるだろうと思う。

対人援助学マガジン創刊以来、継続してきたが40号の区切りがいい機会となった。次号からは別の連載にチャレンジである。これも手放す勇気の一つであろう。

## BACK ISSUES

- 暮らしやすい地域になったのか？39  
2019年12月
- 利用者さんの呼び方は、これでいいのか？38  
2019年9月
- カメラ37 2019年6月
- 窓を教え！36 2019年3月
- 別れ35 2018年12月
- 人生をかける意味があるか？34 2018年9月
- 業務の適正化はできるのか？33 2018年6月
- 安全衛生委員会32 2018年3月

- 施設というコミュニティ31 2017年12月
- 職場づくり30 2017年9月
- 健康管理29 2017年6月
- 音28 2017年3月
- 救世主になりたい援助職27 2016年12月
- 事件について26 2016年9月
- クルマ社会と福祉政策25 2016年6月
- 施設が求める「障害者像」はあるのか？24  
2016年3月
- 連絡帳23 2015年12月
- におい22 2015年9月
- 作業着21 2015年6月
- 食べる20 2015年3月
- 通勤19 2014年12月
- クスリの作用、人の作用18 2014年9月
- 倫理観でかたづけられる暴力17 2014年6月
- 触れる16 2014年3月
- 対談企画「教育と福祉の連携を模索する」2014年3月
- 情報の格差15 2013年12月
- 20年前のノートから14 2013年9月
- そうじのねらい13 2013年6月
- 個別化の暗部12 2013年3月
- グループワークの視点11 2012年12月
- 実習生がやってきた！10 2012年9月
- 月曜日のせいやな9 2012年6月
- 所得を決める福祉職？8 2012年3月
- 世界とつながる社会福祉現場7 2011年12月
- この現場へのたどり着き方6 2011年9月
- 障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会  
2011年9月
- 旅行がない！5 2011年6月
- 職員の脳内回路4 2011年3月
- たかがガムテープ、されどガムテープ3  
2010年12月
- 利用者が仕事上の戦友2 2010年9月
- 障害者自立支援法で不景気に！？1 2010年6月